

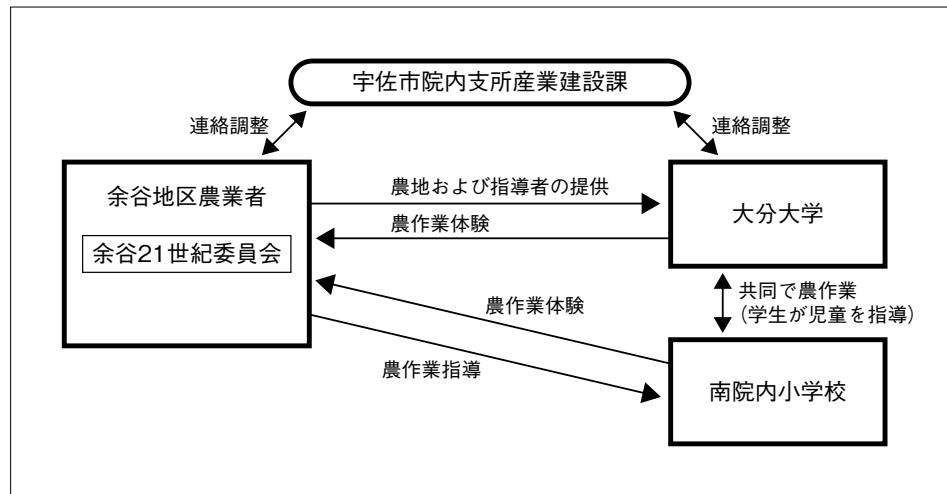
農家にも子どもたちにも学生たちにも貴重な体験 「これからの学校教育を担う未来の教師たちに教育ファームを」

大分県宇佐市院内町の教育ファームでは、地元小学生への農業体験を、大分大学で教職を専攻する学生たちも一緒になって行なう。農家にとっては、自分たちと小学生の間に入ってくれる大学生の「お兄さん」「お姉さん」たちはとても頼りになる存在。そして大学生たちは、農場での子どもたちと農家との触れ合いから、大学の教室では決して経験できないことを学んでいく。九重町の教育ファームでは、日中の体験と夜の農業講話(宿泊)で効果を上げている。

院内町「余谷21世紀委員会」・九重町「あぐり東」農業者と 「未来の教師の卵(大分大学・学生)」の教育ファーム

取組主体

- 名称：院内町「余谷21世紀委員会」・九重町「あぐり東」農業者と「未来の教師の卵(大分大学生)」の教育ファーム
- 担当窓口：大分大学教育福祉科学部(健康教育学研究室)
担当課(者)：住田実 教授
住所：大分県大分市大字旦の原700
電話・FAX：097-554-7626
E-mail：sumita@cc.oita-u.ac.jp
- 団体等の属性：市町村、学校(大学)
- 構成員数：23名
- 連携団体及び協力団体
属性：市町村、学校(小学校、大学)
内訳：宇佐市院内支所産業建設課、宇佐市立南院内小学校、余谷21世紀委員会



取組地域及び地域の特色 (院内町「余谷21世紀委員会」農業者)

取組地域：大分県宇佐市

地域の特色：

宇佐市院内町余谷地区は、大分県北部周防灘に面した、宇佐平野より九州の屋根「九重山系」に通じる中間の位置にあり、峡谷型で標高200～500mの変化に富んだ地形である。平坦地に比べ狭小な棚田をもつ地域では農業生産力が低く、米の作付けを行なうことが農地の荒廃を防ぐことになる。高齢化と相まって地域の活力低下のなかにあって、平成12（2000）年5月に地区全体の活性化を図る目的で集落の全戸が参加し

た「余谷21世紀委員会」を設立。生産のみから脱却し、地域資源を生かして消費者との交流を中心に余谷をアピールし、交流人口を増加させることで地域の活力を高める取組みを実施している。また観光資源も多く有しており、これらの資源を結びつけることにより目的の達成を目指している。「日本の棚田百選」にも選ばれた、稲作と桑、ユズ、シイタケの生産が盛んな地域である。

また平成12（2000）年度より、大分大学の学生を対象とした「農作業体験」の受け入れを開始し、22年度で11年目を迎える。年間に6回（宿泊体験2回含む）の実施で、250～300名の学生が参加している。

取組内容

（1）目的（目標）

「1人の教師」は、その教師人生で数百～数千人にものぼる子どもたちに食育することになるといわれている。そのため、わが国の食育の効果と発展にとって「未来の教師の卵」たちの養成はきわめて重要な問題である。このことから、農業者による直接指導のもと「未来の教師の卵」である学生が年間を通して、米、サツマイモ、ユズ、シイタケ栽培の体験をすることで「生産者が日頃どのような苦労のなかで農作物の生産に携わっているのか」について理解を深め、学生一人ひとりが改めて「食の大切さ」や「地域の自然の恩恵」についての意識を高めることを目的として実施している。

また、将来の学校教育現場で食育指導を担う「未来の教師たち」が児童1～3名に対して1名という割合で責任配属することで、「将来の農作業体験学習も含めた食育指導の力量を培う」という成果を目指した。この方式は、学校側や農作業体験の指導に当たる農業従事者にとって、「農作業中の安全面への効果」が期待されるとともに、加えて「難解な言葉や表現になりがちな農業指導者の説明」を「平易な言葉で解説」する役割をも担っており、児童たちの「学習意欲の高揚」の観点からも大変歓迎された。



田植え



稻刈り

大学生と一緒に農作業体験で大喜びの児童たち（余谷21世紀委員会）

体験に当たっては、「年間にわたる農作業体験」と「自らが栽培した作物を調理してありがたく食する」という一連のプロセスから、「自然の恩恵」に対する感動や「食に関わる生産の喜び」を実感させるとともに、将来の学校や地域における「食育指導者」としての力量の形成をめざしている。

さらに、「教育ファームねっと」（<http://www.edufarm.jp>）として公開されている「『教育ファーム』実践ファイル」および「子ども向けワークシート」は、従来耳にしてきた農作業指導者の「声（戸惑い）*」に応える意味で、そのまま「教育ファーム」の現場においても導入の提示教材として使えると確信した。実際の農地での農業指導者による「実践ファイル」と「ワークシート」の説明においては、各グループに配属されている「未来の教師の

卵」が児童たちの質問に応じたり、「わかりやすい説明」を加えることで一層の教育効果を上げることを目指した。
(写真・左下)



農場での「子ども向けワークシート」の活用



院内町(余谷21世紀委員会)特産のユズの収穫体験

●「実践ファイル」「子ども向けワークシート」の活用は、下記のような「農作業指導者の悩み」に役立つものです。

*【「教育ファーム」の現場における農業指導者の“戸惑い”】

「農業の話ならいくらでもできますよ。ところが実際に幼い子どもたち(主に低学年児童)が目の前に立つと、『いったいどんな話から、どんな順序で、どのようにしゃべったらよいものか』なかなか言葉が出てこないんです。そこで、まずは模範演技だということで作業を始めると、近くにいる子どもにしか声が届かない。そのうち気が散ってあちこちで勝手に遊びだし、小さな子どもたちに何かを教えるのは、教師でない私たちには、なかなか大変なんですよ」。

(2)取組開始時期・経緯

2000年から余谷地区の農業者の指導のもと大分大学教育福祉科学部の学生による農作業体験がスタートし、2006年からは宇佐市立南院内小学校児童も加わって連携が広がった。

(3)対象作物:米、野菜、果実、その他

作物名・種類:ユズ、シイタケ、サツマイモ

選定理由:ユズは院内町の特産物、米は「日本の棚田百選」に選ばれている、サツマイモはどこの地域でも栽培されており、栽培がそれほど難しくなく、収穫率が高い。

(4)具体的な取組内容

〔稲作体験の取組み〕

南院内小学校と大分大学が連携し、余谷地区農業者の指導のもと小学生と大学生による協働の農作業体験として、田植え、草取り、稲刈りの一連の稲作体験を実施した。収穫した米は、秋の収穫感謝祭において料理体験や餅つき体験を行ない、収穫の喜びをともに味わった。

〔サツマイモ栽培体験〕

南院内小学校と大分大学が連携して、余谷地区農業者の指導のもと、小学生と大学生による協働の農作業体験としてサツマイモの苗植え、収穫の体験を実施した。

〔ユズの農作業体験〕

大分大学の大学生が、余谷地区農業者の指導のもとユズ畑の草刈り及びユズの収穫体験を実施した。

〔シイタケのコマ打ち体験〕

余谷地区農業者の指導のもと、大学生による農作業体験としてシイタケのコマ打ちを実施した。

(5)年間スケジュール

6月上旬	田植え
7月上旬	サツマイモの苗の植付け。田んぼの草取り
9月上旬	稲刈り、かけ干し
10月下旬	ユズの収穫
11月上旬	サツマイモの収穫
11月中旬	秋の収穫感謝祭
12月下旬	シイタケのコマ打ち

(6)参加者数・属性の実績及び推移

余谷地区農業者 22名

大分大学学生 延べ280名

宇佐市立南院内小学校(1～6年生) 38名

(7)経費

平成22年度総事業費 190万円

大分大学「フレンドシップ事業(農作業体験と地域住民との交流)」から負担。

食事代として300円(1泊2日の場合は食事代と施設費として2500円)を大学生が個人負担している。

これまでの成果

- (1)農作業体験を通しての地元の農業従事者と触れ合うことで、「自然の恩恵」に対する感動や「食に関わる生産の喜び」を実感とともに、地元で生活する生産者の方たちが「日頃どのような思いや苦労のなかで農作物の生産に携わっているか」について理解を深め、児童一人ひとりが改めて「食の大切さ」についての意識を高めることができた。
- (2)教師を目指す大学生に児童の農作業体験をサポートさせる試みは、低学年から高学年へと発達段階の差が大きい児童への対応のみならず、安全面の観点からも現地指導者より高い評価を受けた。本来、教員養成系大学・学部はすべての都道府県に存在することから、本事例と同様の試みは全国各地の「教育ファーム」において実現可能であり、今回の成果は地域社会における「食育のキーパーソン育成」という観点からも意義深いと思われる。
- (3)院内町余谷地区の特産であるユズ栽培(専業従事者による直接指導)は、ほとんどの学生にとって初めての貴重な体験であり、ユズの栽培方法のみならず、「地域おこし」としての意義について理解を深めることができた。さらに、農作業体験をきっかけとして余谷地区の「ふれあい運動会」や大分大学の学生による「交流コンサート」の開催など、地域と大学生の交流が深まり活力ある地域づくりにつながっている。
- (4)「教育ファームねっと」(<http://www.edufarm.jp>)で公開されている実践ファイルとワークシートは、農作業体験に関わる「指導内容」を体系的に網羅しており、「子どもに興味深く伝える」という教育効果の観点

からも、積極的に「各々の農地と作物をめぐる指導内容」と効果的に融合させることで一層の教育効果が期待できることが実証された。特に雨天の現地の場合、ラミネート加工のシートはまったく雨の影響を受けず、この点からもきわめて有効であることが実証された。(写真・左下)



雨天のナシの収穫における「子ども向けワークシート」の活用



宿泊の教育ファームにおける
夜の農業講話での「実践ファイル」の活用。
熱心に聞き入る中学生たち(あぐり東)

宿泊体験(中学生)の夜の農業講話で「実践ファイル」と「子ども向けワークシート」を活用した場合(「あぐり東」の事例)写真・右上

「あぐり東」農家の中学生による2泊3日の初日の夜間を利用した「農業講話(30分)」においては、「実践ファイル」を活用しながら「おはなし農業講話」を試みた。

その内容は、「実践ファイル」を活用しながらも、農業従事者によって「当該農地と作物」をめぐる「おはなし講話」であり、3日間に及ぶ宿泊体験の初日の内容として教育効果はきわめて高かった。

●農業講話を実施した「あぐり東」農業者・安達道康さんの話

「これまで、ただ思いついたことをダラダラと話していただけだったのですが、実践ファイルがあれば、さてどの内容から話し始めてどのような順番で、という具合に自然と頭の整理がついて楽でしたよ。もちろん私ならではの話の中身もたっぷり触れますが、ファイルのお蔭で話も全体的にまとまつたので、子どもたちも聞きやすかつたようです。その証に、たくさん質問が出ましたからね」。

今後の構想、課題

今年取り上げた地元院内町の特産物ユズに引き続いで、大分県が全国一の生産高となっているシイタケについても取り上げていくことで、「地域に根ざした農作業体験」としてさらに発展させていきたい。

なお、体験レポートを提出した大学生の多くは、自らの「専攻」や「子どもたちとのふれあい」とも密接に関連させながら記述していた。今後は学部の教育課程における「生活科」「総合学習」などの体験的な学習プログラムとのいっそうの連携を図りたい。

みんなのコメント集

取組の
実践者

農家

「大学生が班に配属されると、子どもたちも真剣に聞いてくれるし、わからないことを大学生に聞いてもいるようありがとうございました。作業中の安全面においても目の届かないところで学生が親切に世話をしてくれるので安心できました」

「普段人にものを教えるなど経験がなかったのに、こうやって農作業に関心を持って熱心に話を聞いてくれる姿を見ると、これまで農業を続けてきた甲斐とか誇りのようなものを感じます」

「農作物の栽培を小学生たちのような将来の消費者とか教師志望の学生とともに体験することは、農業の現状や食についての理解を底辺から広げる意味でも大変な有意義なことだと思います」

「年間を通して大学生たちが農地へ足を運ぶので、地域の農業者にとってもまとまりがでて、いいことだと思います。また収穫感謝祭などのイベントでも大学生の参加のおかげで盛り上がり、村おこしにも貢献してくれています」

参加者

大学生

「子どもたちと触れ合いながら、自分たちが普段何気なく食べているものの原点に触れるという貴重な体験ばかりで、学ぶこと、考えさせられることが多くありました。子どもたちの笑顔は大切にしていかなければならぬし、また私たちが食べるまでの生産プロセスではこんなに多くの手間と苦労と汗を流していることを知り、食べものは大切にしなければならないと学びました」（社会福祉専攻・2年女子）

「農家の人々の知恵に尊敬の念を覚えました。今まででは、食料価格の高騰や安全などに関してどうしてもっと値段が下がらないのかという消費者側からの考えしか持っていました。実際の農作業を体験してみると、食べものができるまでのプロセスは消費者が考えている以上に大変で、簡単なものではないものだと強く感じました。この経験を教師になっても生かしていきたいと思います」（社会科専攻・2年男子）

「大学の授業では学べない大切な勉強をしていることの充実感をおぼえました」（英語専攻・1年男子）

「一人の子どもが、大学生になったら自分もまたこの体験に参加してみたいと言つてくれたことが、何より嬉しかったです」（国語専攻・2年女子）

「大量の木が、シイタケの栽培という役割を終えたあともカブトムシなどの幼虫の住処になって新たなのちを育む場となるという農家の方のお話に新鮮な感動をおぼえました」（理科専攻・1年男子）

「農作業体験の昼食でご馳走になったあのトマトの味は、どんな栽培ができるのか、実際の畑を見てみたりました」（家庭科専攻・3年女子）